病院歯科における歯科衛生士の役割について

歯科診療技術部門　小林　愛，山田万由子，杉山　千穂
歯科口腔外科　久保田　崇，鈴木　孝典，白杉　迪洋

歯科衛生士業務は歯科衛生士法により，①歯科診療補助，②歯科保健指導，③歯科予防処置の三大業務が規定されている．当院歯科口腔外科は診療業務内容が口腔外科診療に特化しているため，歯科衛生士の業務も外来外科手術，処置介助と周術期等口腔機能管理をおもに行っている．

今回，病院歯科における歯科衛生士の役割(有病者への対応，救急対応など)について，現状の活動内容と今後の課題とともに報告する．

keywords：歯科衛生士，病院歯科，周術期等口腔機能管理

1．はじめに

歯科衛生士は医科における看護師のように，歯科医師と共同して歯科医療業務を行っている．現在歯科衛生士は日本において年間約7,000人が誕生し，そのほとんどが一般開業歯科医院で勤務している．

その業務としては，①歯科診療補助②歯科保健指導③歯科予防処置の三大業務が規定されている．一般開業歯科医院に勤務している歯科衛生士はこれらの業務を比較的まんべんなく行うことができるが，一般開業歯科医院と診療業務内容の異なる病院歯科口腔外科勤務の歯科衛生士においては，その業務内容や役割がかなり異なる．これは外科処置を中心に紹介受診する患者，各種全身疾患を持っており一般開業歯科医院では管理が困難な患者などが受診し，一見単純と思われる歯科予防処置(スケーリング，ブラッシング指導など)を行うだけでもリスクを伴うことが少なくない．

そこで今回，当院(病院歯科)に勤務する歯科衛生士の役割と現状での活動内容を確認し，現状での課題の抽出と今後の課題解決に向けての取り組みについて報告する．

2．病院歯科口腔外科での業務内容および現状報告

(1)歯科診療補助

歯科診療は歯科医師を中心としたチーム医療として行われ，その中で歯科衛生士は診療を補助するとともに，歯科医師の指示を受けて歯科治療の一部を担当するなど歯科医師と協働で診療にあたる．歯科診療補助の範囲は多岐にわたり，歯科診療を円滑に行うために大切な役割を果たしている．また歯科医師と患者とのコミュニケーションに配慮し，信頼関係にもとづく心優しい歯科医療を行うためにも歯科衛生士の役割が期待されている[1)]．

当院では一般歯科治療(う蝕処置，歯周病治療，義歯の作製など)は行わず，おもに外科処置を伴うものや循環器疾患，脳血管疾患などを有する患者の診療を行っている(年間延べ患者数9,155人，うち初診患者数2,985人．2021年度集計数)．そのため診察補助は，一般歯科治療時の口腔内吸引，インレー，クラウンなど補綴物の調整装着診療補助はなく，外科処置時の機械準備，処置時の機械出し，手術補助など年間2,000件の外来手術に携わるとともに，745件の入院患者への入院説明，検査案内，退院後外来通院調整，手術などに対する理解度，既往歴やADLの確認，不安などを傾聴し患者の様

子を病棟へ伝達するなど，いわゆるPFM（Patient Flow Management）の一部も行っている．

また口腔外科外来には常時看護師が在籍していないため，先天異常である口唇口蓋裂患者の家族，悪性腫瘍患者などへのメンタルケアにもかかわらなくてはならない．さらに近年はCOVID-19感染拡大予防のため術前PCR検査や健康観察確認などの対応も必要になっている．

口腔領域だけの知識だけでなく，全身状態を把握するための知識が必要であるとともに，感染対策の知識や救急対応の知識も重要となるため，院内BLSの受講はもちろんACLSコースも受講し緊急時も対応できるようにしている．また当院の歯科衛生士は（一社）日本有病者歯科医療学会認定歯科衛生資格を取得し自己研鑽に努めている．

（2）歯科保健指導

むし歯や歯周病は生活習慣病である．そのため治療よりも予防，さらに本人自らが生活習慣を改善することが大切であり，正しい生活習慣やセルフケアを実行するための専門的な支援（指導）が不可欠である．歯科保健指導は幼児期から高年期までの各ライフステージにおいて，また健康な人，病気や障害がある人などすべての人に必要である．セルフケアのスキルアップ指導，要介護者らに対する介護者への指導，近年では食育支援や嚥下機能訓練も新たな歯科保健指導の分野として注目されている[1)]．

当院においても栄養・摂食嚥下サポートチーム（NST）や呼吸療法サポートチーム（RST）などのチームメンバーとして参加し，口腔ケア，口腔トラブルの対応はもちろん患者の早期回復に向けた支援をチームの一員として行っている．

（3）歯科予防処置

歯と口腔の疾患を予防する処置としてフッ化物塗布や機械的歯面清掃などの予防的な医療技術があり，歯科衛生士はこのような歯科予防処置の専門家である[1)]．

当院では一般的な歯周病のケアは行っていないが，医科との連携が重要な「周術期等口腔機能管理」を重点的に行っている．

周術期等口腔機能管理とは，頭頸部領域・呼吸器領域・消化器領域などの悪性腫瘍手術，心臓血管外科手術，人工股関節置換術などの整形外科手術，臓器移植手術，造血幹細胞移植，脳卒中などに対する手術患者，がんにかかわる放射線治療，化学療法または緩和ケアを実施する患者らに対して，術前の口腔衛生や口腔内環境状態などの把握を行い，歯科疾患を有する患者や口腔衛生状態不良の患者における口腔内細菌による合併症（手術部位感染や病巣感染），手術の外科的侵襲や薬剤投与などによる免疫力低下により生じる病巣感染，人工呼吸管理時の気管内挿管による誤嚥性肺炎などの術後合併症や脳卒中により生じた摂食機能障害による誤嚥性肺炎や術後の栄養障害の予防，口腔粘膜炎などの有害事象の予防，口腔乾燥の予防，口腔内不快感の軽減などを目的としている．また，術前に動揺歯の固定や抜歯，保護床を作製することで挿管時の脱落，誤嚥，歯牙破折などのトラブルを回避することができる．2012年4月より保険導入され，歯科での算定に加え医科でも手術加算が算定可能となっている．

病棟での口腔ケアは看護師も実施しているが，歯科衛生士に依頼される専門的口腔ケアは難易度が高く，より高い技術が求められる．ICUから緩和ケアまでその病態はさまざまであるため，主治医，看護師と連携をとりながら介入している．

当院では現在，周術期等口腔機能管理を心臓外科，消化器外科，乳腺外科，呼吸器外科，腫瘍内科，呼吸器科，口腔外科，緩和ケア内科の患者に介入している．

2021年度の周術期等口腔機能管理依頼件数は352件であり，各科別依頼件数は心臓外科111件，消化器外科71件，乳腺外科49件，呼吸器科21件，腫瘍内科9件，口腔外科8件，緩和ケア内科83件であった（**図1**）．他に周術期等口腔機能管理料算定の対象外ではあるが婦人科12件，心臓内科（局所麻酔）14件の患者にも介入している．

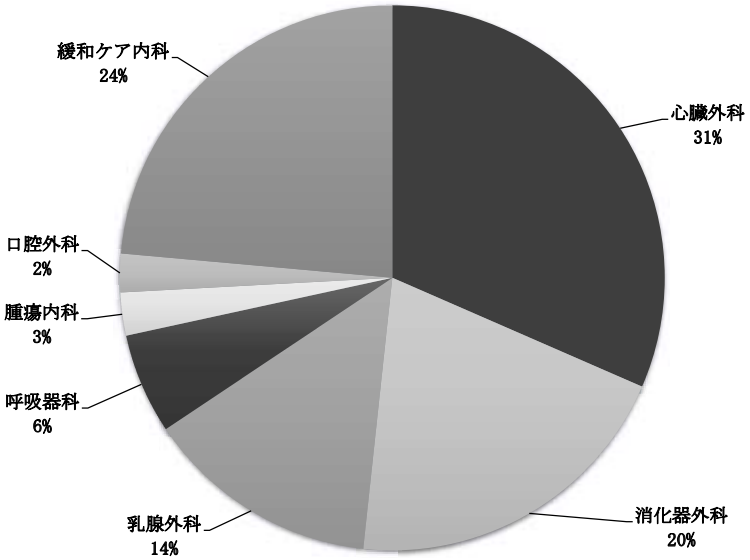

図１．2021 年度周術期等口腔機能管理依頼件数

３．今後の課題とまとめ

現在は 3 人の歯科衛生士が在籍しているが業務のほとんどが診療補助になっている．毎日の外来診療終了後や曜日限定での口腔ケア実施となっているため,看護師との連携やケアの予約,ケア時間の確保に難渋している．今後は，マンパワー不足の解消，業務内容の見直しや改善を行い，病棟カンファレンスなどに積極的に参加できるようにし看護師との連携を深めることで，より患者に寄り添った医療提供が可能となり必要であると考えている．また今まで以上に他職種(多職種)とも連携を密にとり，さらに充実したケアを実施することが重要と考える．

周術期口腔機能管理は退院後の口腔管理，う蝕治療，義歯治療などの一般歯科治療が必要になることが多く院内だけでは管理を完結できないため，地域歯科医師会との連携が重要となる．この場合，連携は歯科医師のみではなく歯科衛生士との連携も重要と考えられる．さらに医療から介護への移行をスムーズに行うため地域包括ケアシステムへの参入も必要と考える．いずれにしても，患者にとって安心・安全な退院後の口腔機能管理を充実させ,快適に口からの食事を楽しめ,患者の QOL を維持し，最期まで充実した生活をおくることができるための支援の必要性を感じている．そのための早期の地域連携システム構築が重要である．また院内においては現在介入できていない科もあるため，医科歯科連携を深め周術期等口腔機能管理の必要性をアピールする必要があり，今後も継続して口腔管理が十分に行えるような後進の育成も重要であると考える．

文　献

1）日本歯科衛生士会．歯科衛生士の仕事とは．[引用 2022-05-15]．
https://www.jdha.or.jp/aboutdh/

2）国立研究開発法人国立がん研究センター．がん情報サービス 全国共通がん医科歯科連携講習会テキスト(第二版).[引用 2022-07-07]．
https://ganjoho.jp/public/qa_links/book/medical/pdf/training_course_text2.pdf

3）日本口腔ケア学会学術委員会他編．治療を支えるがん患者の口腔ケア．東京：医学書院；2017.

4）片倉　朗，野村武史，澁井武夫 他：がん患者さんと歯科衛生士．デンタルハイジーン 37(3): 260-276, 2017.

5）松村由美，西川典良，瀧田正亮 他：周術期口腔機能管理 現状と今後を見据えて．大阪府済生会中津病院年報 28(2): 246-250, 2018.